CA1
EA947
B71
#50 Sep.1983
DOCS

カナダ

特集・在日カナダ人

1983年9月
No. 50
ISSN 0389－1852

EXTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTERIEURES
OTTAWA
NOV 7 1983
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE

LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E
3 5036 01030032 8

60984 81800

トピックス――2

特集・在日カナダ人――4

パメラ・アスキース／テッド・マクニーリー／ゲン・ハマダ／グレーン・マーチン／ガストン・プチ／ジム・マレー／C・W・ニコル／テッド・コーリア／ジョン・マギー／トレーシー・グラス

カナダ人の誇り――14

われら姉妹都市⑪ 池田町&ペンティクトン――15

カナダ人物記⑪ ジョン・ブルック――16

編集後記――16

Bulletin Canada 発行 カナダ大使館

TOPICS

自動車問題審議会の設置を決定 カナダ政府、特別委報告に対応

カナダ政府は、国内自動車業界が直面する諸問題に対処するため、自動車問題審議会を設置することになった。

これは、八月十五日、ラムリー通商産業・地域経済開発大臣が発表したもので、五月に自動車関係業界および労組で構成する民間の自動車問題特別委員会が提出した勧告書に対する連邦政府の対応措置の第一弾。

ラムリー大臣によると、政府は今後、国内自動車産業の状況について年次報告書を作成することになったほか、①自動車部品工業会と協力して新技術の取得につながる合弁事業やライセンス生産に関心をもつカナダ企業に対して援助する計画をたてる ②部品生産の拡大と生産性の向上を図る方策を業界と検討する ③雇用調整・能力開発については、雇用・移民省と通産省の間で了解覚え書の交換を検討する――という。

特別委員会が勧告した、自動車業界の技術・産業開発に対する政府援助については、ラムリー大臣は七月初めに発足した通産省産業・地域開発計画を利用するよう呼びかけた。同計画は、産業基盤整備、技術開発、工場設置、設備の近代化および拡張、市場開発などに適用されることになっている。

ラムリー大臣によると、政府は今回の対策に続いて、貿易政策、売り上げ税、労働者給付金といった特別委員会の提案も検討し、今秋にもまとまった対策を発表するという。

BC州に「ネモト駅」「ネモト広場」 北東炭開発の功績を讃えて

ブリティッシュ・コロンビア州に、「ネモト駅」「ネモト・プラザ」というのができた。

いずれも、州内北東部で進んでいる日加共同石炭開発プロジェクトの取りまとめに尽力した鋼管鉱業株式会社の根本恒治社長（前日本鋼管専務）の功績を讃えて命名されたもの。

ネモト駅に立つ根本氏(左)とドン・フィリップスBC州産業大臣

ネモト駅はCN鉄道の本線から、州北部沿岸にあるリドリー島の石炭積み出し港に向かう支線の分岐点。ネモト・プラザは、石炭開発のために作られたニュータウン、タンブラー・リッジのタウンホールの前の市民広場である。

日本鋼管の専務だった根本氏は、BC州北東炭開発プロジェクトに関する交渉で日本鉄鋼業界のまとめ役として活躍。五年間の交渉をへて、一九八一年二月、合意が成立、開発が開始された。今夏、炭鉱とリドリー島を結ぶ最後のトンネルが貫通、来年一月には石炭を積んだ第一船が日本に向かう予定である。

トルドー首相、内閣を改造 十三ポストを入れ替え

トルドー首相は八月十二日、内閣の一部改造を発表した。変わったのは十三閣僚で、そのうち八人は他のポストからの横すべり、残り五人が新規登用である。総選挙に備えた態勢固め、というのがもっぱらの世評である。

副首相兼外務（アラン・マケッカン）、エネルギー・鉱山・資源（ジャン・クレチエン）、大蔵（マーク・ラロンド）、通産（エド・ラムリー）、農務（ユージン・ウェーラン）、国際貿易担当（ジェラルド・リーガン）、経済開発・科学技術（ドン・ジョンストン）、通信（フランシス・フォックス）などは変わらなかった。

横すべりまたは新しく就任した主な閣僚は次の通り。

○雇用・移民大臣 ジョン・ロバーツ○運輸大臣 ロイド・アックスワーシー○対外（フランス語圏）関係担当国務大臣 ジャン＝ルック・ペパン○労働大臣 アンドレ・ウエレ○国防大臣 ジャン＝ジャック・ブレ○供給・サービス大臣 シャルル・ラポワント。

文学作品の録音テープ カナダ社が販売に成功

シャーロット・ブロンテの「ジェーン・エア」やルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」といった英米の名作が、カセット・テープで聴ける――。

カナダでこの商売を始めたのは、オンタリオ州ダンズビューにあるListen for Pleasure社。盲人用に作られていた〝読書用テープ〟にヒントを得て、英国で吹き込まれた文学作品のテープを北米で一般用に売り出したところ、大当り。一九八〇年の始めから今年の夏までにカナダと米国で約二十五万本のテープ（一本二千四百円）を売り、テープの種類も三十七から七十九に増やした。

ダーキン社長は、今年中には九十種類に増やし、売り上げ本数も八五年までに二、三百万本に伸ばしたい、と意気盛ん。

テリドンからNAPLPSへ

カナダが開発したビデオテックス・システム「テリドン」の名称が、今年6月からNAPLPS（ナプリプス）に変わった。NAPLPSとはNorth American Presentation Level Protocol Syntaxの頭文字をとったもので、カラー画像の作成・伝達に関する北米標準規格を指す。これは米国規格協会（ANSI）、カナダ規格協会（CSA）、それに電子産業協会（EIA）の合意で決めたもので、テリドンを基準とする北米の統一規格が定められたことにより、カナダのテリドン関連メーカーの活躍が期待されている。

ブルーム新商務公使が赴任

カナダ大使館では、今夏、経済・商務担当のテイラー公使が駐米大使館に転任して、新たにアーマン・ブルーム氏が着任したほか、若干の人事異動があった。

ブルーム新公使（写真）は、一九三七年七月三〇日、フランスのパリで生まれ、サー・ジョージ・ウイリアムズ大学（モントリオール）、モントリオール大学で経済学を専攻。香港、北京、ロンドン、パリをへて東京に赴任した。

その他の異動は次の通り（カッコ内は前任者）。

○科学技術担当 P・エグルトン参事官（J・マクドーワル）○査証部 L・キャロル参事官（C・アダムズ）○総務 L・J・C・ウォーカー参事官（R・アーシャンボー）○農務 L・ボア

ベール一等書記官（D・マクニコル）○広報　R・W・H・ジョーンズ一等書記官（B・バーネット）○林産　P・ドラブル三等書記官（G・スコット）○一般消費財　J・ミロ二等書記官（L・ボアベール）。

細菌で飲料水を浄化
カナダの研究者が実証

バクテリアを使って水中の汚染物質が除去できることを、カナダの研究者が証明した。

「水を浄化する最良の方法は、自然そのものを利用することにあると考えた。水中の汚染物質を喜んで食ってしまう細菌がある。それをうまく利用しようと思った」と語るのは、NRC（科学技術振興事業団）から助成金を得て研究したクレイン・エンジニアリング社のクレイン社長。

クレイン氏によると、ある種の細菌に酸素を与えると大いに繁殖した。ヘドロ状になったそれを、特殊な鋼鉄製フィルターにかける。フィルターの上を水が通ると、その上にねばねばした膜状のものができる。そのねばねばしたものが細菌の集まりで、通過する水に含まれている微生物やフェノール、リン酸塩、肥料成分、鉛、放射性核種、DDTなどの合成殺虫剤といった汚染物質を食べてしまう。

「あとは残留物を除去するために、塩素をわずかに加えるだけ」とクレイン氏。しかも、この浄化法は、通常の方法と同じぐらい効果的で、しかもはるかに経済的かつ健康的だという。

ディスプレー装置の放射線
カナダ厚生省が〝安全〟報告

オフィスや家庭で広まっているコンピューターのディスプレー装置（ビデオ・ディスプレー・ターミナル＝VDT）について、健康への影響が懸念されているが、カナダの保健・厚生省はこのほど「放射線に関しては全く心配ない」との報告書を発表した。

厚生省は、他の政府省庁による調査を検討したほか、独自に規制値の五十万分の一のレベルのエックス線を測定できる装置を使って五十二種のVDTを調べた。

その結果、操作中のVDTは検出可能のエックス線を何ら生ぜず、発生する可視光線も曇天の戸外における光度の二十分の一しかないことが判明した。

また紫外線と赤外線も、検出不能か、検出されても職業上の照射規制値の約一万分の一と低かった。超短波線も検出されなかった。低周波数のラジオ周波（RF）は若干、一部のVDTの表面から検出されたが、オペレーターの位置ではほとんど感知できなかった。超低周波は、他の一般的な電気製品と同じ程度のものが検出されたが、健康には影響ないという。

ダッシュ8、初飛行テストに成功
三六人乗りの近・中距離旅客機

カナダのデハビランド社が、三年がかりで製作に取り組んでいた近・中距離旅客機「ダッシュ8」が、このほど九十分間の初飛行テストに成功、型式証明の取得に一歩踏み出した。

ダッシュ8機の評判は上々で、発注数はすでに五十三機にのぼっている。来年八月頃、型式証明がおりるのを待って、最初の引き渡し先であるオンタリオ州の地域航空会社ノーオンテアに届けられることになっている。

ダッシュ8は、ターボプロペラ・エンジン二基を搭載した三十六人乗りの旅客機で、高高度を飛んでも内部の気圧が正常に保たれているほか、速度二百六十ノット、航続距離六百カイリ（約千百キロ）、離陸に要する滑走距離八百二十六メートルと、同種機と比べて多くのすぐれた魅力を備えている。

三菱電機、カナダに工場
カラーブラウン管を生産

三菱電機がオンタリオ州ミッドランドにあるRCAカナダのカラーブラウン管工場を買収することになり、失業率が三割をこえる地元で歓迎されている。

このRCA工場は昨年十二月に閉鎖されたもので、三菱電機はこれを二千万ドル（約三十八億円）で買収、さらに五年間に二千六百万ドルをかけて施設の近代化と製品の多様化を図る。これだけの資本投入と日本からの技術移転により、生産性は三倍以上も増大し、逆に総経費は大幅に減少することが見込まれている。カナダの製造業に対する日本の企業投資としては、これが最大。

三菱電機はカナダに一〇〇％出資の現地法人を設立してミッドランド工場を引き継ぐ。元従業員約六百人の中からおよそ二百四十人を新たに採用して、今年末から生産に入る構えで、一九八七年までには残り三百六十人も雇用する計画。

新会社は当初カラーテレビ用ブラウン管を月産三万本のペースで生産するが、軌道に乗ればOA機器のカラーディスプレーに使う高解像度ブラウン管の生産に移行するという。

マルローニ氏が初議席

八月二十九日にノバ・スコシア州で行なわれた連邦下院議員の補欠選挙で、先に進歩保守党の党首に選出されたブライアン・マルローニ氏が当選した。

補欠選挙は、同党の現職議員がマルローニ氏に議席を譲る目的で辞任したあとを受けて実施されたもので、当選は確実視されていた。

マルローニ氏はこれで初めて連邦議会に議席を得たことになり、第一野党党首として政府に代表質問ができるようになった。

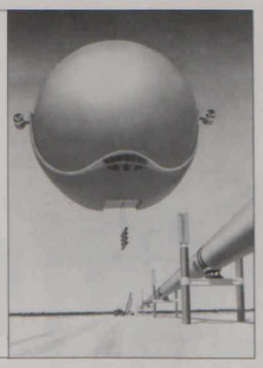
下院の議席数は、現在、自由党一四七、進歩保守党一〇三、新民主党三一、無所属一。

任期は八五年春までだが、その前に総選挙が実施されるのは必至と見られている。

●大使館案内

○日加産業協力セミナー　十月十三日　大阪ロイヤルホテル、十四日　東京・経団連会館

○海洋産業展　十一月八―十日　カナダトレードセンター



本紙第41号でも紹介したこの飛行船（**写真**）が、いよいよ86年に生産開始される見込みとなった。LTA20-1（LTAは「空気より軽い」という英語の頭文字）と呼ばれるこの飛行船は、ケベック州にあるバン・ドゥッセン（Van Dusen）社が開発したもので、垂直に離着陸し、球体の部分が〝マグナス効果〟により水平軸にそって回転しながら飛ぶ。地形調査や監視、資材運搬に適している。最大運搬能力は45トン。

ダッシュ8

在日カナダ人

日本で活躍している十人のカナダ人をご紹介する。小説家、芸術家、禅僧、ビジネスマン、スポーツマン、茶人、サル研究者……と、いろいろな分野にわたっている。

日本に腰を落ちつけ、日本について勉強し、日本人と共に生活し、あるいは東西の架け橋として活躍しているカナダ人は多い。特に宣教師として来日し、教育その他の分野で日本人の国際化教育に貢献しているカナダ人は、枚挙にいとまがない。

最近は日本研究のために長期滞在する人も増えた。中には、「日本人より日本のことに詳しい」と言われる人もでてきた。北海道には、ラジオのディスクジョッキーをやっている人物もいる。紙面のつごうで、ご紹介したい多くの「在日カナダ人」を割愛せざるを得なかった。

パメラ・アスキース

〝サル学〟を研究する人類学者

端山 文昭

日本のサルがはじめて世界の人びとに知られたのは、ざっと百四十年前のことである。紹介者は、日本がまだ鎖国の時代にあって、世界に向けてたったひとつ窓口をあけていた長崎・出島のオランダ商館付ドイツ人医師で、博物学者でもあったF・V・シーボルトである。そしていままた、カナダの人類学者によって、ニホンザルが世界の霊長類研究にあらたな展望を示唆しようとしている。

パメラ・アスキースさん、三十一歳。現在、京都大学理学部の動物学教室、伊谷純一郎教授（人類進化論）のもとで研究を続けている。来日してまもなく二年

アスキースさん

になる。彼女の研究テーマは、西欧と日本がそれぞれに長年取り組んできた〝サル学〟の文化的背景について比較、検討を加えようというものである。

およそ日本の科学は、医学をはじめとして、あらゆる分野を幕末から明治維新にかけて西欧から一気にうけ入れ、その方法、テクニックを身につけ近代化を図ってきた。ところが、霊長類研究については、ことに第二次大戦後、まったく独自な研究をおこない、世界の霊長類研究者から関心をあつめている。

パメラさんの来日動機も、そのあたりの追究にある。

パメラさんはモントリオールで生まれ、トロントのヨーク大学で心理学、人類学を学んだあと、カナダのサファリ・パークで二年間、捕獲・飼育されたライオンの行動（ハンティング）について調べた。さらに東アフリカ・タンザニアに飛び、セレンゲティで野生ライオンを調査し、比較研究を行なった。一九七四年、英国・オクスフォード大学に入り、生物学、人類学、哲学を専攻、日本のサル学に関する研究で博士号を得ている。

生物はすべて社会をもっている――こんな概念をうちたてたのは今西錦司博士である。これは西欧の概念にはなかったもので、彼女の目に非常に新鮮なものとして映ったようだ。欧米におけるこれまでの生物の観察は、行動を解析してゆく、いわゆる行動生物学に重点を置いてきた。つまり、生物・動物にはもって生まれた性質があって、そこから逃がれることができ

ないという考え方である。つまり〝人間〟とはっきり一線を画していたわけである。

日本の場合は違っていた。「日本の霊長類研究者は、サルの行動を調べるのに、相手を擬人化し、人間といわば同列においているんですよね。西欧では、動物に人間的な意味をもたせる用語を使った論文はタブーのようになっていた」と、パメラさんは言う。

来日してまもなく、パメラさんは首をかしげるような現場にでくわした。

愛知県犬山市にある京大霊長類研究所を訪れたとき、サルの供養がおこなわれたのである。

「研究の対象になっていたサルが死んでしまうと、みんなでていねいに葬ってやるんですね。〝死なせてしまってゴメンナサイ〟とか、〝長い間、私たちのために役立ってくれてアリガトウ〟という気持ちをもっている。サルにも心があって、その霊をなぐさめる――このような擬人化の観念は、西欧の研究者にはないものです」。

サル供養ばかりではない。日本人の社会では、針供養、茶筅供養、筆供養なども行なわれて、塚まで建てられていることに彼女はおどろいた。人間とかかわりをもった〝もの〟、〝道具〟にまで霊のイメージをいだき、信じる背景はいったいどこからきているのだろうか――と。これを追跡してみることが、日本の霊長類研究の際立った特徴を把握することになるかもしれないと、彼女は思う。

哲学・心理学者でもあるパメラさんは、霊長研グループの応援を得ながら、日本人の思想・文化に大きな影響をあたえた人々の著作を読みあさった。西田幾太郎、長谷川如是閑の先人たちのものから、現在活躍している文化人類学、生物社会学者の文献も……。もちろん、サルのいる〝現場〟にも、精力的に足を運んだ。

来日してから一年余りの間に、パメラさんは時間の許すかぎり、ニホンザルとの〝対面〟を求めて各地を飛び回った。大阪府箕面市、京都嵐山に始まって、長野県志賀高原の地獄谷、宮崎県幸島、大分県高崎山、兵庫県淡路島、鹿児島県屋久島……。これらの地域は、一九四八年いらい、京大霊長類研究グループを中心とする日本の学者たちが長期にわたってサルたちを観察し続けた〝聖域〟である。

餌づけから個体の識別にはじまった日本の研究は、やがてボスザルにひきいられ、集団ごと行動する〝群れ行動〟の記録、ボスを筆頭に順位が整然としているサル社会の秩序構造などをつぎつぎと明らかにしていった。また、イモを洗って食べたり、ムギを水に浸して食べるなど、サルたちが新しい生活文化を獲得し、仲間に伝播してゆくようすも、三十年前に記録されている。

「霊長類の社会的行動も、まだまだ複雑で、一般的な理論として成り立っていません。しかし、サルの社会性や、その他の疑問を解くには、日本のような長期的な研究が必要かつ大事であるということが西欧の研究者の間で認識されだしてきました。いずれにしても、科学においてひとつの問題を模索する場合、その解決にいろいろな方法があるということを知ることが大切です。日本の〝サル学〟は霊長類の行動そのものの知識を西欧の学者たちに与えたばかりでなく、科学に対しても主観的な意見を応用すべきだということを教えています」と、パメラさんは語る。

パメラさんは、秋には『霊長類学の行くえ』と題したレポートをまとめるという。

（サンケイ新聞大阪本社文化部次長）

テッド・マクニーリー

アイスホッケーの最優秀外人選手

ハーブ・若林

一九七九年、西武鉄道アイスホッケー・チームは、外人選手を二名入れることになった。誰にするかは、監督である私に任された。私は以前、テッドに会ったことがあり、アイスホッケー選手として優秀なばかりか、人間的にも大変すぐれていることに感銘を受けていた。テッドは当時、シニア・ウエスタン・リーグのスポケーン・フライヤーズで選手兼コーチをやっており、日本へはとても来れそうになかったが、思いきって交渉してみると、意外にすんなりと引き受けてくれた。

テッド・マクニーリーは、一九五〇年十一月七日、ブリティッシュ・コロンビア州クランブルックに生まれた。小さい頃からアイスホッケーに興じ、二十五歳から四年間はエドモントンの実業チームで活躍。その後アメリカに招かれ、ナショナル・リーグでも好成績をあげた。

私がテッドの試合ぶりを初めて目にしたのは、彼がカナダに帰って三年後の七七―七八年シーズンだった。スポケーン・フライヤーズの選手として日本のナショナル・チームとの試合で示したテッドのプレーに、私はゾクゾク興奮したのを覚えている。いつの日か西武

右がマクニーリーさん

が外人選手を入れるようなことになれば、テッドこそその人だ、と私は心に決めた。

私の希望は七九年に実現した。そしてテッドは期待を裏切らなかった。来日して二年目に、西武チームはジャパン・リーグで優勝し、テッドは特別賞（最優秀外国人選手）に選ばれたのである。昨シーズンには、彼は三回、優秀ディフェンスマンに選ばれている。

テッドは、西武だけでなく、日本のアイスホッケー界全体に大きな影響を与えた。彼の態度、目標、果敢さ、テクニック――すべてに、日本人プレーヤーは注目した。私は他チームの監督から、テッドみたいなカナダ人選手はほかにいないだろうか、とよく相談を受ける。そんなとき私は、テッドが日本におけるカナダ人のイメージ・アップに大いに貢献しているのを知って、非常に嬉しくなる。

昨シーズンが終わった後、堤義明・西武鉄道社長から、テッドをチームのコーチにしたいという提案があった。これは単に戦力強化の面だけでなく、アイスホッケーの世界で西武とカナダの結びつきを一層強化できる良策であった。

テッドと日本との関係は、十年前に遡る。当時彼は、ブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）の夏期アイスホッケー教室で教えており、西武はデビッド・バワー神父の紹介で選手を教室に参加させることにした。それ以来、西武は毎年、選手たちを同大学に派遣しており、テッドもまた夏期スクールの講師を続けている。

こうしたUBCチームとの長年にわたる友好関係を記念して、西武チームは今年八月、UBCチームを日本へ招待し、国土チームを加えて、三者で友好試合を展開した。これは、テッドが西武のコーチに就任して最初の試合であった。

テッドは、日本人にアイスホッケーの精神と技術を教え、カナダとカナダ人について身をもって教えてくれた。だが教えるだけでなく、日本から学ぶことにも熱心だ。西武に身を置いて日本の会社のあり方になれ、日本人の生活習慣を学び、日本語を学んだ。今では日常会話には苦労せず、字も平仮名や片仮名なら読み書きできる。

奥さんのキャロル、二人の愛娘（五歳のリンゼーと一歳のシャノン）と東京に住むテッド・マクニーリーは、今日も品川・プリンスホテルのアイスマリーナで練習に励んでいる。

（西武鉄道アイスホッケーチーム監督）

ゲン・ハマダ

ホッケーコーチを兼ねる事業家

多田　正俊

国鉄大阪駅から歩いて五分、梅田の北寄りに総合スポーツ施設「梅田スポーツ・ガーデン」がある。ここに西日本で最大・最強のアイスホッケー・チームがあるとは、うかつにも知らなかった。小学生、中学生、高校生を中心に総勢六十四人。「梅田メイプルリーフス」というのがチームの正式名称である。昨年から、女子チームも結成されている。このチームの生みの親で、コーチもつとめているのが日系カナダ人と知って、驚いた。チームが結成されて今年で、もう九年目になる。

ハマダ氏

商いの都・大阪にはじめて青少年のアイスホッケー・チームを育てたのは、ゲン・ハマダ氏だ。身長一・六四メートル、四十五歳。みごとな口ひげを生やし、微笑が絶えない。ソフトな物腰は、大学の先生を連想させる。

ハマダ氏は一九三八年五月、バンクーバーで生まれた。両親はともに島根県境港の出身で、日系二世ということになる。家族は兄が二人、弟、妹がそれぞれ一人。

戦後、トロント近郊ブランプトンに移り、高校までそこで暮らすが、彼は生まれつき、スポーツが大好きであった。とりわけアイスホッケーには熱中した。六歳のころからすでにホッケーシューズをはいていた。

ジュニア、シニアとチャンピオンチームに加わり、いつも最優秀選手として活躍した。全オンタリオ高校選手権では、三回も優勝している。

一九六二年、オンタリオ州ウォータールー大学を卒業。その年、ハミルトン市にあるマクマスター大学の保健体育教育の特別コースに進む。大学時代の花はここで咲く。翌年、全カナダ大学選手権で優勝し、オールスターのライトウィンガーとしてベスト6に選ばれる。アイスホッケープレーヤーとして、彼の地位と名前は広く知れわたることになった。

その名声は、日本にも届いた。マクマスター大学で一年間の勉強を終えたとき、彼は日本のアイスホッケー連盟から手紙をもらった。「日本でやってみないか」という打診であった。当時は十分な資金もなく、残念ながらこれをことわった。

そして、ウッドストックの高校教師になり、経済・地理と体育を教える。アイスホッケーのほかフットボール、テニス、ゴルフ、水泳、陸上のコーチとして大活躍する。

トロント近郊のミミコ高校の教師に変わってから、再び日本から誘いがかかる。大阪に本店がある福徳相互銀行のアイスホッケーコーチとして、一シーズンの契約を交わし、来日した。一九六九年のことである。

「私はカナダ人ですが、血は一〇〇パ

ーセント日本人です。そのことを大事にしたいし、いろんな体験、実験を重ねたかったんです」

来日を決めたときの心のうちを、いまハマダ氏はそんなふうに語っている。

一九七〇年の大阪万国博終了後、帰国するが、翌年、また日本との縁ができる。日系カナダ人のアイスホッケーチームを引率して、各地で十一試合（うち八試合に勝つ）を行なった。

そのうち、日本で生活することを本気で考えだした。そして、知人もたくさんいる大阪に本当にやってきた。一九七三年のこと。

彼は大阪・住吉区の民間の英語学校で英語を教えるかたわらで、事業を始める。カナダと日本の貿易業に目をつけた。アイスホッケーをはじめとするカナダのスポーツ用品の輸入である。スポーツ用品では、カナダの方がすぐれた用品がたくさんあるからだ。

梅田に設立した貿易会社にCASEI TRADING CO.（カセイ・トレーディング）という社名をつけた。CANADAのCAとNISEIのSEIを合成してつくったという。

最近、営業品目に競走馬が加わった。日本はイギリスなどから、タネ馬を輸入しているが、もともと親は北米産だという。そんなことなら、いっそ、北米から輸入する方が費用も安上がり、という理屈を、彼は実行したのである。いまでは、競馬用のタネ馬を扱っているノースアメリカン・ブラッドストック社の販売代理店も兼ねているというから、将来、彼の手がけた馬が日本の競馬場を走り回るはずである。

ハマダ氏が育てたアイスホッケーチーム「梅田メープルリーフス」で彼が教えたことは、「勉強が一番、アイスホッケーは二番」ということだった。学校での成績がよくないのに、アイスホッケーだけうまくなっては本物でない、とのカナダでの信念をそのまま大阪に持ち込んだ。チームの子供たちは勉強もよくするのだそうだ。

ハマダ氏には、今夏、また新しいチャンスが巡ってきた。北海道の製紙会社から、アイスホッケーのヘッドコーチ就任の声がかかったのである。考えた末、彼は引き受けることにした。二シーズンの契約である。「日本のナンバー3にはしてみせる」という意気込みだから、これからは、大阪よりも北海道で暮らす生活がふえるだろう。梅田のチームはアシスタントにまかせた。

貿易の方も、完全に手を引くわけにはいかないだろう。

「何といっても日本は経済が活発。日本にいる限り、中国、台湾、ベトナムなどアジア各国を相手にビジネスの手を広げることができる。それがまた楽しい」

大阪には、福岡生まれのアツ子夫人がいる。結婚十二年。子供はいないが、夫人は文字通りハマダ氏の片腕である。

実兄のジュンさんはバンクーバーの日系老人サロン「隣組」開設者の一人。三年前、同地で病死した。

私はバンクーバーでジュンさんに、大阪でゲンさんに会ったわけだが、人の不思議な縁のつながりを感じないわけにはゆかない。

（読売新聞大阪本社社会部記者）

グレーン・マーチン

禅の道を求めて修業八年

形部 脩

小浜市伏原の曹洞宗・発心寺（ほっしんじ）の一番奥まったところに建つ禅堂。高い吹き抜けの天井、紙張りの格子戸、そして土間（どま）。午前四時。まだあたりは薄暗い。墨染めの法衣姿で座禅する外国青年僧。音ひとつしない静寂さと、ひたむきな求道の姿が周囲の空気をピリッとさせる。

若狭の国・小浜の後瀬山（のちせやま）の山すそにあるこの禅寺は、世界各国から日本にやってくる〝求道〟の青い目の青年たちにとって、名を知られた存在だ。

東洋の哲学や仏教を研究、あるいは〝禅の道〟を求めて日本にやってきた外国青年は、小浜の禅寺の話を聞いて、迷わず小浜にやってくる。現在、アメリカ人五人、ドイツ人四人、フランス、カナダ一人ずつの十一人の青い目の青年僧が俗世間を離れ、ひたすら修行を積んでいる。

カナダのバンクーバー市出身のグレーン・マーチンさん（三十一歳）もその一人。僧名は「倶璉（ぐれん）」。ブリティッシュ・コロンビア大学で生物学専攻の大学生であったが、勉強するだけの人生に飽き足らず、内面的な充実と人生の意義を求めて日本に来たのが十年前のこと。小浜の発心寺での〝求道〟生活はもう八年を数える。

座禅を組むマーチンさん

発心寺での生活は毎日が同じ修行の繰り返しで、毎朝四時に起床、二時間の座禅をした後、本堂や庫裏、便所、境内の清掃、朝の読経、そして原田雪慧（せっけい）住職から禅や仏教の講話を受けるといった日課。

食事の作法や食べ物も、修行中の日本人僧と全く同じで、薄暗い庫裏の板の間

にきちんと正座して、ご飯とみそ汁だけの質素なもの。「はじめのうちは食べ物もなれていませんでしたし、畳の上での生活、座る生活、行儀（ぎょうぎ）作法など、戸惑うことが多かったですが、段々となれて今では不自由を感じません。天候は日本の夏はとても湿気が多くて蒸し暑いですが、冬の寒さはバンクーバーと大体同じですね」

話をしていても、わからない日本語があると、すぐ辞典を持ち出してきて、いちいち確かめる。「充実」という言葉がわからなくて何度も辞典で確かめ、勉強するマーチンさん。立ち居ふるまい、あいさつひとつにも誠実な人柄がにじみ出ていて、好感が持てる。

「発心寺での八年間にわたる生活。何を思い、何を感じますか」の問いに、マーチンさんの返事は、「道を求めるとひとくちに言ってもなかなか……。まだ修行の途中です。人間にはいろんな悩み、苦しみがあり、煩悩（ぼんのう）があり、仏教の言葉にある解脱（げだつ）への道は厳しく遠いものがあります」

マーチンさんにはカナダのバンクーバーで電気関係の会社に勤める父と、それに母、そして二人の姉妹がいるが、マーチンさんは「今のところまだ当分、小浜の発心寺にいます。いつ国へ帰るのか、先のことはわかりません」という。

お盆の仏事や新年の祝いに訪れてくる檀家の接待を通じて、〝とし（年）〟の移りを知り、新緑の春や紅葉の秋、雪の冬に季節の移り変わりを知るだけ。ひたすら座禅を組み、めい想し無心無我の中から内面的心性の究明を求める……。その求道の姿は日本人も外国青年も同じ。きょうもマーチンさんは墨染めの法衣姿で禅堂にこもり心静かにめい想する。

（福井新聞小浜支社長）

ガストン・プチ

多面的に活躍する美術家修道士

岡村　正

ケベック州トロワ・リビエール市生まれのフランス系カナダ人であるガストン・プチ氏は、「音楽家になろうか、それとも美術家になろうかと考えましたが神父になりました」という。いまドミニコ会士の芸術家として活躍しているから、だいたい希望通りに進んだわけである。

滞日二十二年のプチ氏が住んでいるのは、東京渋谷区南平台、蔦のからまったカトリック教会の裏庭にある鉄骨造りの大きなアトリエ兼書斎。この住まいは千客万来。各界の人びとが訪れるのは、その暖かいもてなしと、ひょっとすると主人の見事な腕前の手料理に魅かれてかも知れない。

美術界における業績を紹介するだけで優にこの紙数は尽きる。「人は何をして来たかではなく、何をしようとしているかで受けとめなければならない」というのがプチ氏の口癖だから、それに免じて過去のタイトルの紹介は省かせていただく。

溢れるように旺盛な好奇心の人で、世界中どこへでも出かけて行き、そこの人びとに会い、話し、仕事をする。生活の大半は旅であるといってよい。

キリスト教はいうに及ばず、仏教、ヒンズー教、イスラム教、インカ、エスキモー等々あらゆる宗教・文化に興味を持ち、それも書籍のみでなく、直接現地を訪ね体験を重ねるやり方でものにする。もちろん日本文化は大好きで造詣も深い。来日して書道をさる名家に師事し、たちまち古代から現代に至る書体を習得してしまった。不二竹心という雅号を持っている。その雅号のとおり、素直でしなやかな感性の主である。

「美術家」と紹介するしかないほど創作活動も多方面にわたり、油絵はもとより、リトグラフ、シルクスクリーン、木版など版画、彫刻、塑造、作陶、ステンドグラスと、ひとつところにとどまることがない。

どれひとつ取りあげても十分に語ることが出来る博覧強記ぶりだが、そのすべてを使って現代世界を読みとろうとするところにプチ氏の本領がある。

異なった時代、異なった空間、異なった文化のなかに生まれたもの同士の衝突と共存の神秘が、プチ氏の心を魅きつけてやまないように見受ける。これこそすぐれて現代世界の課題だからである。

したがって具象・抽象などというスタイルによる分類は、プチ氏の仕事には何の意味もない。

氏にとっては、どんなスタイルもそれだけ独立しての価値はなく、現代世界というコンテクストにおいて意味をもつことばのひとつに過ぎないのである。

言い変えれば、プチ氏の関心は物にはなく、ただ物の存在（プレザンス）そのものにあるのである。

美術においても氏の目に映るのは唯一のもの、「私は在りて在る者である」と告げる神のみなのだ。修道士司祭の面目躍如ではないか。現代世界が興味深いの

自宅の畳の上でくつろぐプチさん。写真は『私の部屋』提供。

は、異なったもの同士が、そのもの自体を超えたところで互いに結ばれる存在の神秘に満ちみちているからである。

文化交流の手伝いもまた、氏の重要な仕事のひとつである。そのお世話になった人も多いだろう。日本を訪れる各国の若い美術家がしばしばアトリエにわらじを脱ぐ。そしてしばらく逗留して制作して行くこともある。

数年前、現代日本の版画家の重要な仕事を世界に紹介するべく大著を出版したが、その企画から取材、作家とのインタビューはもとより、その製作過程、作品の撮影まで一人でやってのけたタフガイでもある。

現代日本美術のカナダへの紹介、カナダの現代美術の日本への紹介のための展覧会の企画など、実にまめに協力している。

その他、美術に関する著作がいくつかあり、目下、美術における物語性をテーマに、世界のあらゆる美術（日本の絵巻物、宇治拾遺なども含まれる）を探索している。

世界をめぐって撮りためた美術関係のスライドを持って、依頼があれば講演にも出かける。

ここで氏の属する日本のカトリック教会における活躍に言及しなければ、片手落ちのそしりを受けるだろう。それは一般の人びとの目にふれる機会が少ないだけで、広く日本各地に存在する典礼美術の分野である。

一九六〇年代のはじめ、第二バチカン公会議でカトリック教会の社会との関わり方に大変革がもたらされた。それまでのどちらかというと消極的であった関わりが積極的な方向に転じたのである。それは当然のことだが典礼の刷新に及び、それまではヨーロッパ中世までに完成された様式を踏襲あるいはアレンジをすればこと足りていた教会建築、典礼美術、典礼音楽は、対応を求められて新しい創造の時代に突入した。

それまでのものは、神学を含めて、キリスト教の本質と、直面する現実に立って問い直し洗い直さなければならなくなった。日本でも古い聖堂の改修、新しい聖堂の計画など、たくさんの相談がプチ氏のところに持ちこまれた。規範も前例もないこの分野は、まさにプチ氏の本領とするところで、しっかりと神学に根ざした、しかも現代世界に対する卓越した氏の識見によって、それらは次々に実現していった。

おそらくそれらは、これからも続く創造の踏石として、すべての人にとって共有の財産となるだろう。しかもプチ氏はそれらを氏一人の仕事とはせず、日本人の協働者を育てる機会にしたのである。日本の教会はまことによき人を得た。

渋谷の一区民である氏は、区民の美術展に出品して受賞するとか、沿線の住人として私鉄の広報紙に登場するとか、地域にとけこんでいる。今日ももしかすると、道元坂のどこかの店で焼鳥や刺身で一杯やっている氏を見かけるかも知れない。

（建築家）

ジム・マレー

サケと古武道で結ぶ民間大使

吉崎　昌一

カナダよりも日本に滞在している方が多いと信じられている怪人物。かなり以前からテレビのフィッシング番組に登場し、その精悍かつハンサムな顔と巨軀は日本のスポーツ・フィッシャーマンのなかでは、つとに有名であった。矢口高雄氏作『釣りキチ三平』がベストセラーになると、氏の名前は子供達の間でもよく知れわたるようになる。この漫画の中で、三平をむかえるカナダのサーモン・ダービーの会長として、実名で描かれているからだ。カナダのサケつりは、ルアー・フィッシングに夢中になったヤングのあこがれの的である。

マレー氏

だがマレー氏は単なるつりの名人だけではない。サケ資源保護の旗頭の一人としても著名である。かつて太平洋国際サケ委員会のカナダ代表を六年間にわたってつとめ、現在は太平洋サケ協会の副会長として東奔西走している。日本でカムバック・サーモン運動がはじまったのを見るや、これを全面的に応援、しばしば札幌を訪れ、いくつかの学校をまわってサケやサケの棲める河川環境が、いかに人類にとって重要かを説いて歩く。子供達は熱狂した。あこがれの人物が目の前に現れ、ニコニコしながら握手してくれるのである。サケおじさん、アンクルサーモン、いつのまにかこれが氏のよび名になってしまった。このことがどの位日本の運動にプラスになったか、測りしれないといってよい。

だが、もっとも重要なことは、マレー氏が同様の運動をただちにブリティッシュ・コロンビアでも開始したことであろう。太平洋サケ協会のメンバーを動かし、この地最大の新聞発行部数をもつバンクーバー・サン紙と語らってセイヴ・ザ・サーモン協会を組織したのである。そしてカナダ連邦政府が数年来おこなっていたSALMONID ENHANCEMENT PROGRAM（サケ増殖委員会）を支援して大がかりな住民運動を展開した。その結果、サケに関する住民運動は、国際的なひろがりを持つことになった。北海道石狩町とキャンベル・リバー市との姉妹提携、二百五十校をこえる相互の学校交流の計画がすでに動きはじめている。その

ための委員会の委員長としても、忙しい毎日である。

日本にのめりこんでいるとさえいわれる程の、マレー氏の日本観と日本人にたいする親愛感は、日本歴史と古美術にたいする造詣のみならず、実は古武道の修練からもたらされたといってよい。BC州の剣道協会の会長を長年つとめ、カナダ剣道協会の役員としても活躍、さらに柔道の有段者であり、そのうえ弓道にも詳しい。まさに日本人顔負けなのである。

あまりにもいそがしいマレー氏の毎日を見て、周囲の友人達はハラハラしどうし。だが本人は、この数年来急にふえてきた銀髪を気にしながらではあるが、仕事に釣りに、そして日本とカナダの友好のために走り回っている。

「このあいだバンクーバー空港に立っていたら、日本のこども達が走り寄ってきたんだ。おれをとり囲んでね……アンクル・サーモン、ミスター・マレー?と聞くんだ。泣けたね。カナダ太平洋航空につとめていて、こんなにうれしかった事はなかったね。」

両国のために、そして太平洋のサケのために、大いに活躍の期待される熟年中期の素敵なオジサマなのである。

（北海道大学助教授）

C・W・ニコル
捕鯨小説に取組む優しい冒険家

矢澤　高太郎

冒険家という言葉は、今や死語に近い。だが、小説家で野生料理の名人、C・W・ニコルさんは紛れもなく、正真正銘の冒険家といえる。

北極から南極、アフリカからヒマラヤへと、世界を股にかけた冒険生活二十余年。「自然と人間の調和」を求めて生きる、たくましく、優しい野生人である。

清々しい秋風が渡る北信濃の黒姫高原。長野県上水内郡信濃町字柏原。国鉄信越線黒姫駅から黒姫山へ向かって北東へ約三キロ。カラマツの疎林の中に、モダンな赤い屋根の民家が見えてくる。これがニコルさんの住まいである。

「そう、ボクは北極人。冒険こそが人生のすべてさ」

身長一八〇センチ、体重八十七キロの堂々たる体軀。精悍な顔をほころばせ、巧みな日本語で語るその半生は、限りないドラマに満ちている。

一九四〇年、ウェールズ生まれ。少年時代はイングランドの緑したたる大地で、自然を師とし、友として育った。

長い冒険の人生の第一歩は、ハイスクール時代に始まる。カナダ北極圏へ生物学の研究に行く恩師に、家出をして同行。初めて北極の地に立った。十七歳の時だった。

「我々より体の暖かいアザラシが、冬の北極の氷の下で暮らしている。ホントに感動したよ」

三年後、カナダへ移住した。もちろん、カナダの大自然に憧れてのことだった。ここでは環境庁の技官となり、同国北部の漁業問題や自然と野生動物の保護の分野で活躍した。専門は海生哺乳動物の研究。そのために北極へ行くこと十数回。イヌイット（エスキモー）と長期の共同生活を体験し、エスキモー語の達人にもなった。

さらに、一九六七年から二年間はエチオピアへ。猟区管理官として国立山岳公園の開設に従事した。この間、ライフルでゲリラや山賊と渡りあうこと数知れず、左腕には今も大きなナイフの傷跡が残っている。

日本に関心を持ったのは、少年時、柔道に親しんだのがきっかけだった。一九六二年に、空手の修行のため初来日。日本の捕鯨船に乗って、南氷洋へは二回、足を運んでいる。さらに、七五年の沖縄海洋博ではカナダ館の副館長に。ここでVIP専門の通訳をしていた真理子さんと知りあい、八〇年秋、黒姫山麓にスイートホームを構えた。

だが、このニコルさん。冒険家の面だけを強調されるのはあまりお好きでないようだ。「ボクはホントは作家として認めてもらいたいんだけどね」と主張する。

小説家としての処女作は、四年前に角川書店から刊行された『ティキシイ』。神秘的な北極を舞台に、一人の若者の魂の遍歴を感性豊かに描いたものだ。

だが、その名を一躍高めたのは、一昨年春、同書店から出版された『冒険家の食卓』だった。ウェールズ、フランス、カナダ、エチオピア、北極、南極と、世界各地への冒険行の際に作った自慢の料理を、それぞれの土地の人々との心の触れあいを通じてユーモラスに描いた本である。それも単なる体験談でなく、〝自然とのつき合い〟を基礎にすえた見事な自然論にまで高められており、大きな反響を呼んだ。

「料理というのは、その土地の人間と同じように作って食べるのが最もおいしいね。一緒に同じ物を食べるということは、相手を信用するということでしょう。親しさと信頼と感謝を込めて、どんな民族とも愉快に食べたよ。『イタダキマス』は最高のあいさつさ」

北極グマのロースト、クジラのスシ、ハリネズミの蒸し焼きにネコのミートスパゲティ――。つまみ食い専門の相手に

自然と共に暮らすニコル夫妻

はムースの糞のチョコレート包みまで登場する、大地の香りに満ちた、豪快で野趣あふれる野生料理の数々が、十八話に分けて紹介されている。

日本人には肉食人種の不気味さを感じてしまう向きもあるようだが、その本人が熱烈な自然保護論者であるところに、C・W・ニコルという人間の真髄がある。

「自然が好きでたまらないから、その恵みを感謝して受けるだけよ。生きるためと、自分の領分を侵された時以外、ボクは絶対に動物は殺さないよ。動物は昔からお互いに殺しあい、食べあっていたね。それでいて全体のバランスはちゃんと保ってきた。それが本当の共存じゃない？ほとんどの人間は、自分が動物の一種だということを忘れているよ」

独特な自然哲学を聞いていると、観念的な動物愛護論者や自然保護運動家の姿が、いかにも浅薄なものに見えてくる。自然に対する敬虔な祈りと感謝。

ニコルさんが日本に住みついたのも、捕鯨の問題が発端だった。

「外国ではクジラは養殖のミンクのえさになってるね。金のために獲ってるんだよ。でも、日本は人間が食べるために捕鯨をする。それのどこが悪いの。そんなこと言うボクは、動物愛護の人たちに殺すと脅されたよ。でもその人たちが飼ってる犬や猫はエチオピアの子供の五人分のタンパク質をとっているね。これおかしいんじゃない？　動物食べちゃいけないんなら、いったい何を食べるの。麦や大豆をとるのに畑を作ったって、自然破壊ということになるんじゃないの」

そして、江戸時代から現代までの日本の捕鯨の歴史をテーマにした長編小説の執筆を決意した。その取材のため、七五年から一年間、和歌山県の太地に住んだ。小説の名は『勇魚(イサナ)』。原稿用紙二千枚の大作になるという。

現在の生活は、この小説の執筆を中心とする毎日。五木寛之の「戒厳令の夜」の英文翻訳の仕事もある。余暇には野尻湖でカヌーをこぎ、空手の稽古に汗を流す。時には地元の猟友会の仲間と山へ入り、野ウサギ、タヌキ、カモなどを捕り、得意の料理の腕前を披露する。

信濃の秋は早い。山々が真紅の紅葉に包まれ、厳しく美しい冬が巡って来る日も近い。メルヴィルの「白鯨」にも匹敵する壮大な物語を書き続けるニコルさん。きょうも黒姫の大自然に向かって語りかける。

「大地よ、風よ、水よ。イタダキマス」

（読売新聞文化部記者）

テッド・コーリア
木版画を会得した水彩画家

松岡　春夫

コーリアさん

東京都府中市に住む彫刻家テッド・コーリアの生まれ故郷であるノバ・スコシア州は、カナダ東海岸の半島にある。ノバ・スコシアについて知識のない人でも、ルーシー・モンゴメリの「赤毛のアン」でアンの活躍する舞台であるプリンス・エドワード島のすぐ近く、といえばその位置や自然環境が理解できると思う。

テッドが生まれたのは一九四七年。五人の兄弟姉妹のうち、長姉は主婦であるがインテリアデザインを指導し、兄はカメラマン、弟は彫刻家、妹は詩人、末妹はモダンダンサー、テッドは画家と、それぞれ第一線の芸術家として活躍している。テッドは早くも四歳頃より絵画の才能をみせ、両親を驚かせ喜ばし、八歳で絵画コンテストに出品して入賞している。ノバ・スコシアの両親の家の居間や二階へ続く壁面には幼年時代からの作品が飾られているが、それらの作品は両親の誇りであり、町に住む人々の誰もが認める絵画への才能がきらめいている。

マウント・アリソン大学で美術を専攻し、画家であり、同大学の教授であるテッド・ポーファーに水彩画の伝統的技法を学び、またデイビッド・シルバーバーグに日本の木版画を紹介される。

日本の木版画との出会いはテッドの人生を大きく変えた。一九七二年、シルバーバーグのすすめもあって、木版画技法を習得する目的で初来日する。すでに著書などで知っていた木版画家吉田遠志を訪ね、プロの彫師、摺師の間に入って日本の伝統木版画を学ぶようになる。吉田先生はテッド・コーリアについて「来日した時すでに、絵画の素養は十分にあった。木版画の摺彫の技術は今ではプロとして通用する。しかし彼の水彩画については知らなかった」と語っている。

一九七八年、東京・アメリカンクラブでテッド・コーリアの木版画の初の個展が催された。期間中に摺り増しするのが大変なほど、大好評だった。

テッドは、自然であるがままの対象が好きという。例えば、富士山中腹のほとんど崩れた廃屋、雪原に立つ枯れたとうもろこしというのが彼の水彩画のテーマだ。彼の作品には雪景や広大な自然がよく描かれる。しかし単に風光明媚な美しさを描くのではなく、人とそこに広がる宇宙を掴みとろうとする。今年三月の水彩画の個展に出品された『インテリア』は、民家の室内の太い柱、梁、床、障子等が人との触れあいから生じたそれぞれの素材の持つぬくもりを描いていた。彼の目は光の影のようにいつも変化し、われわれの視覚から逃げてゆく対象をも適確にとらえている。

テッド・コーリアのもうひとつの顔はスポーツマンのそれだ。ホッケー、テニス、水泳、野球と何でもこなすが、特に

カーリングには熱心。高校生の時、ユーコン地区大会のボン・スピール（カーリングの競技会）で優勝して以来、何度も優勝カップを手にしている彼は、一九七八年、北海道池田町のボン・スピールに参加したことがきっかけで日本のカーリング全般にわたり指導することになった。日本のカーリング人口は現在では約二万人にふえた。今年中に日本カーリング協会を設立し、北海道、富山、長野、名古屋に支部を設ける予定になっている。テッドは、一九八四年中には国際カーリング連盟に日本も正式加盟できるよう、コーディネイターとして活躍中だ。加盟のあかつきには、一九八五年のスコットランド世界選手権に参加するというのが、日本のカーラーたちの夢である。

（東京銀座・兜屋画廊）

ジョン・マギー

茶道に魅せられて裏千家師範に

南　良成

京都裏千家に多年修業するカナダ人がいる。ジョン・マギーがその人である。ジョンは一九四八年、トロントの牧場主の家に生まれ、長じて大学を卒業するまで、日本とは全く無縁の生活を送っている。ヨーク大学では将来家業を継ぐべく牧畜関係のことを学んでいた。

その彼が来日するに至った経緯は、ほとんど偶然の賜物と言ってよい。ジョンが卒業した一九七〇年は大阪で万国博覧会が開催された年である。この折、オンタリオ州政府はカナダ館とは別個にパビリオンを開設するにあたって、二十五人のコンパニオンを国内で公募した。ジョンは幸運にも採用されたが、当時の彼は日本の文化はおろか、日本語も全く知らないし、動機も「なんとなく東洋へ一度行ってみたい」という曖昧なものであった。

マギーさん

ジョンと茶湯の出会いは、この半年のオンタリオ館勤務の時期のことである。彼は喧噪たる大阪の町に住み、いわゆるカルチャーショックを経験することになる。それまで広々としたカナダの町でのんびり暮してきたジョンにとって、毎日十数万の単位で日本全土から訪れてくる人々に囲まれ、サインや握手を求められる環境は、気も狂わんばかりの状況であったらしい。

雑踏を逃れ少しでも息苦しくない静かな空間を求めて、彼は偶々オンタリオ館近くにあった日本庭園を散策し始めた。そしてある日、その庭園の中に小さな家屋を見つけて、そこへ足を踏み入れたのである。それが茶室であったわけだが、勿論、当時のジョンはそれが何をするための建物であるかも全く知らずに訪れたのである。

が、彼は茶室の静寂な雰囲気の中で温かい接待を受け、たちまち茶湯に魅了され、その後、何度も茶室に足を運ぶようになった。

大阪万国博覧会が閉幕し、任用期限の切れたジョンは、まず姫路に移り住み、焼き物（備前焼）の勉強を始めている。同時に彼は、茶湯を学ぶために姫路から約三十分ばかり離れた竜野の町へ通うことになる。やがて彼は茶湯をさらに本格的に勉強するために京都へ居を移し、直接、裏千家家元の門を叩く。知己の紹介もなく直接家元の門を叩くこと自体異例のことなのだが、この時も運よくジョンは翌日から入門を許可されている。

裏千家家元での茶道の修業は比類ないほど厳しいものである。早朝一時間の座禅に加えて、昼食時の一時間を除いて午前九時から午後四時まで、稽古につぐ稽古である。正座に慣れていない外国人のジョンにとっては、一日六時間にも及ぶ正座は想像を絶する苦業であった。凍りつくような冬の日、肌も焦げ付くような夏の日、冷暖房設備など一切無いところで何時間もの稽古が続くのである。ジョンは述懐する。「私は、遥々カナダからやって来て、何故このような苦労をしなければならないのか。自分は一体何のために茶道を学んでいるのだろうか。こんな疑問にとらわれ、何度止めてしまおうと思ったかも知れない」と。

裏千家家元に入門して十二年の歳月が経ち、彼はついに千宗匠から師範の茶名を授けられる栄誉に浴することができた。一九八二年二月十八日午前八時、ジョンはただ一人、利休堂に導かれ、千宗匠から利休像を紹介され、その眼前で、「千宗悠」の茶名と千家の家紋を使うことを許されたのである。古今、茶道に関心を抱いた西洋人は少くないが、ジョン・マギーほど実際に茶道の世界に没入し、十数年の修業を生身で体得した西洋人はほかにいないであろう。

現在、ジョンは裏千家家元付きの専属通訳として活躍している。四年前、宗室氏がハワイで講演を行なった際、ジョンは初めて家元の通訳をつとめた。彼にとっては仕方なく引き受けた通訳であったが、講演は成功裏に終わった。日本古来の伝統文化の精神を他国で説明することは難しい。茶道精神を語る言葉――侘び、やつし、不完全の美、余情、一期一会等――を自信を持って通訳できる人が果たして何人いるだろうか。こうした言葉を通訳するには、その基礎に茶道精神に対する深い理解と造詣がないことにはとても不可能である。この意味で、まさしくジョンは千宗室氏の講演通訳者として最適任者である。茶人及び通訳者としてのジョンに対する家元の信頼は厚い。このこと

は、宗室氏が海外講演に出られる時には必らずジョンを通訳として連れて行かれることからも窺える。

また最近彼は、千宗室氏の茶事の本（Tea Life, Tea Mind）や随筆（これは英文毎日にQuest for Peacefulnessという題で連載された）の翻訳を手がけた。この随筆の翻訳は単行本となって近く出版される予定である。

カナダとの関連でもう一つ特記しておくべきことがある。それは、一九七八年、ジョンはトロント大学夏期講座の講師を務めていることである。その講座は日本語の集中コースであったが、その中で彼は、カナダの学生達にお茶のお点前を披露し、茶道の精神について語る機会を得た。持ち合わせの茶道具は十分なものとはいえなかったが、一枚のゴザを教室の一隅に敷いて、自らの手と心で茶湯をカナダの若者達に紹介したのである。

いま、ジョン・マギーは平均的日本人より以上に「和敬清寂」の精神を理解する日本的心の持ち主だと言えるのかも知れない。（夙川学院短期大学助教授）

トレーシー・グラス

陶器づくりでどろんこの毎日

福田　純治

日本の焼き物の美しさに魅せられたカナダ女性が、兵庫県芦屋市の滴翠（てきすい）美術館の滴翠窯で陶器づくりの勉強に励んでいる。

「将来、できればカナダの人たちに日本の伝統芸術を紹介したい」と毎日、陶器づくりに、どろんこになりながら汗を流しているこの人は、同美術館付属陶芸専攻科（二年制）生のトレーシー・グラスさん。

グラスさんは一九六一年八月十一日、カナダのトロント市に生まれた。米カリフォルニア州のバークレー大学で東洋の哲学や歴史を学んだ頃から、日本の宗教、座禅、陶芸、書道などに人一倍、興味を持つようになる。

父親の建築設計業ミル・グラスさんが、趣味で東洋の古美術品のコレクションをしており、日本の陶芸品を見る機会が多かったのと、グラスさんが五人兄妹の末っ子で、長兄と次兄が音楽家、三番目の兄は古美術収集家、姉も美術品を鑑賞するのが好きという〝芸術愛好一家〟に育ったために、自然と陶芸の世界へ目が向くようになった。

グラスさんは大学で勉強をするうちに、日本へ行って勉強してみたいという希望がますます強くなる。そこで、まず日本語の勉強に努力した。この頃は「寝てもさめても、日本語、日本語」の毎日だったという。昭和五十四年九月、夢が実現、グラスさんは大阪府交野市の会社員塩口正さん方にやってきた。奥さんの知子さんが英語の先生で、日本語をどしどし教えてもらった。

そして奈良や京都の寺院で、座禅を組み、すみ絵、書道を学んだ。とくにお寺では日本の宗教を勉強、〝悟り〟を知ろうと心がけ、精神修養につとめた。さらにひまを見つけては、近畿地方にある陶器づくりの里を訪ね、陶器を実際に手にしながら見歩きしているうちに、ますます、陶芸品の美しさにひかれていった。

そこで京都の工芸家の門をたたいて、陶器づくりの手ほどきを受けた。わずかの間だったが、岡山の備前焼きのカマ元で修業もした。

このグラスさんの陶器づくりにかける情熱に動かされた京都の工芸家や知人らが、滴翠美術館の陶芸専攻科へ入学することをすすめ、グラスさんは、今春から専攻科生になったのである。

滴翠美術館は昭和三十九年六月に設立され、日本のお正月の遊び道具の「かるた」「羽子板」や京焼き、紀州焼きなどの「陶器・茶器」、飾りものの「人形」などの美術品を公開展示するほか、陶芸と芸術の二つの研究所を併設している。そのうち、陶芸研究所の専攻科は、美術館創立十周年を記念して四十九年に発足したもので、顧問には有名な陶芸家加藤唐九郎さんや元京都市立芸術大学名誉教授の近藤悠三さんといった有名人を揃え、主任教授には京都の伝統工芸作家岩渕重哉さんを据え、講師陣にも大学の美術担当の教授を集めている。このため、陶芸家を志す若い人やお年寄りがつぎつぎ入学している。外国人の専攻生もかなりあり、すでに十余人が巣立っている。

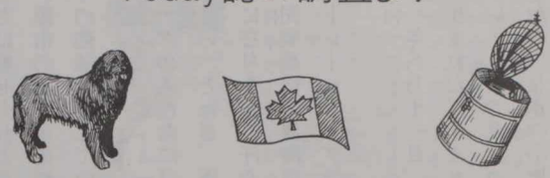
グラスさんは毎日、午前十時から午後八時ごろまで、専攻科の教室で粘土をこね、創作活動に励んでいる。何回やっても、気にいった作品ができず、一度、形のでき上がったものをつぶして、初めからやり直す、という苦労の連続だが、うまく作れたときの喜びは大きい。最近は原爆の広島に思いをはせて花びんを仕上げた。「もっと、もっと日本のこと、陶芸のことなどを知りたい。わからないことが多いので、なんでも勉強をします。わたしは小さい子が好きなので、将来、カナダへ帰って、子どもたちにものをつくる楽しみを教えたい」というのが、グラスさんの目下の夢である。

（読売新聞芦屋通信部）

陶器づくりに励むグラスさん

カナダ人の誇り

――Today誌の調査より――



カナダ人が最も誇りにしているものは何だろうか。新聞の付録としてカナダ全国で配布されている雑誌Todayが、読者から募って「ベスト115」にまとめた。その中からいくつか拾ってみると――。

一八〇八年にオンタリオ州ミルトンのピーター・L・ロバートソンという人が考案した、頭部に四角形の穴がついたネジとドライバー。片手でも簡単に締めることができ、しかもトルク（ねじりモーメント）が大きいのが特徴。

カナダの芸術や文学などの育成・発展に力を入れているカナダ・カウンシル（文化振興協会）、雄大な景観で国内外の観光客や保養客を集めている国・州立公園、赤と白の鮮やかなカエデの国旗、テレビやラジオの中継に利用されている国内通信衛星「アニク」なども、カナダ人の誇り。

そのほかには、次のようなものや人物、あるいは場所があげられている。

●サゲネー川　ローレンシアン楯状地の深い峡谷を流れるサゲネー川の沿岸は、世界でも指折りの景観として有名。

●小麦　カナダの硬質春小麦は、パンなどに使われる上質小麦として世界的に知られている。日本がカナダから輸入しているのも、すべてその品種だ。ソ連や中国でも、食糧としてだけでなく、品種改良の交配用にカナダの硬質春小麦を輸入している。

●ケベック市　「岩山にたたずみ、大海の湾のごとく広々とした川に洗われ、要塞化した頂きからはるか眼下に広がる……」と、十九世紀米国の文豪ヘンリー・ジェームズが表現したケベック市は、カナダ最大の観光名所のひとつ。

セントローレンス川に臨むケベック市

●ナショナル・バレエ学校　ロンドンのロイヤル・バレエ学校やレニングラードのキーロフに匹敵するバレエの名門校で、有名なバレエ・ダンサーを数多く輩出している。

●フクロウ繁殖研究所　世界でもユニークなこの研究所（オンタリオ州セント・キャサリンズ）は、野生フクロウの繁殖を専門に研究している。

●マーガレット・ローレンス　マニトバ州出身の作家。A Jest of God（総督賞受賞、米国ではRachel, Rachelの題で出版）、The Divinersなどの名作で知られる。

名馬ノーザン・ダンサー

●ニューファンドランド犬　水かきのついた足、ふさふさと厚くて油成分を含んだ毛――カナダ原産のこの犬は、漁には欠かせないお供だ。これまで数多くの漁師を救っている。

●オラクル・ターンテーブル　ケベック州シャーブルック大学の哲学教授がデザインしたこのターンテーブル（レコードプレーヤーの回転盤）は、International Audio Review誌から最高級の折り紙がつくほどの名品で、世界中から寄せられる注文に生産が追いつけないという。

●「カナダーム」　宇宙の腕としてその優秀性を実証したスペースシャトルの遠隔操作システム。カナダにおける宇宙工学のレベルの高さを示した。

●モーリーン・フォレスター　マーラーとドイツ歌曲の世界的歌手。

モーリン・フォレスター

●ノーザン・ダンサー　一九六一年にトロントで生まれた世界的な種馬。その子孫は日本を含め多くの国で優勝している。

●アン・マレー　数々のジュノー賞、三回のグラミー賞に輝く国民歌手。

●オスカー・ピーターソン　モントリオールで生まれ、現在はオンタリオ州ミシソガに住む、ジャズ界の王者の一人。

●肥満治療　インシュリンを発見し、人工膵臓を開発したカナダは、肥満治療の先進国だ。

●ストラトフォード・フェスティバル　北米随一のシェークスピア劇場。英国のストラトフォードとそっくりに作られ、カナダや英国の名優が、毎夏、シェークスピア劇を演じている。

●太平洋沿岸インディアンの芸術　文化人類学者レビ＝ストロースによると、ハイダ族インディアンやクワキュートル族インディアンのトーテムポールや仮面は古代ギリシャの芸術に匹敵するという。

その他、オカ・チーズやチェダー・チーズ、バンクーバー島のロング・ビーチ、九九・九八パーセントの純度を誇るマグネシウム、昨年亡くなった天才ピアニストのグレン・グールド、高さ五百五十メートルのCNタワー、ホッケー界のヒーロー・ウェイン・グレツキー、俳優のドナルド・サザランド、低燃費ジェット「チャレンジャー」、カナディアン・ロッキーなどが、ベスト115に入っている。

われら姉妹都市 11

池田町&ペンティクトン

研修旅行での出会い

小松 厚

●ペンティクトン

私たち池田町商工会青年部が第二回海外研修のため、姉妹都市のBC州ペンティクトンを訪問したのは昨年の一月であった。

CP機で成田を飛び立った一行十四名は、機内でカナダ観光局職員の歓迎を受け、早くも姉妹提携の感激を味わったのだが、バンクーバーに到着したときは悪天候、乗り換えのペンティクトン市行きの飛行機がフライトできないというアクシデントに会った。

ようやくのことでバスをチャーターして五時間半後、夕闇迫まるペンティクトンにたどり着いた。後で聞いた話によると、この時期は飛行機の欠航が多いので、最初からバスをチャーターした方が良いとのこと…。初体験の北方圏の自然の厳しさと共に、予定には無かったロッキー山脈の美しさを車窓から見ることができたのは、不幸中の幸いだった。

青年会議所（JC）役員の出迎えを受けたわれわれは、ホテルで荷を解く間もなく、歓迎レセプション会場へと急ぐ。会場いっぱいのJCメンバーとお互いに自己紹介、記念品の交換、通訳を交えての対話、会食後はアイスホッケーの観戦、さらにはホテルに戻ってからも交流がつづいた。JCメンバーの気取りのない対応、姉妹都市そして同じ世代の想いがわれわれの緊張感を解きほぐしてくれた。

通訳は池田町出身の村崎君がやってくれた。高校生のとき交換留学生としてペンティクトンへ派遣された村崎君は、カナダがすっかり気に入って、そのままビクトリア大学へ進んだ青年である。私もカナダの大きさ、人々の暖かさに魅されて、「もっと若かったらここに住みつきたい」と思ったほどである。それにしても、通訳として活躍する村崎君を見ていると、姉妹交流も根づいてきたな、という感を深くした。

二日目は、市内見学をさせてもらう。

一行が一行だけに、皆さん商売熱心。JCの方々の案内で、業種別に会社や商店を訪ねて回った。中には趣味の切手を見に、郵便局へ行く者もいる。菓子業をやっている私は、その関連のところを案内してもらった。ペンティクトンはピーチなどお菓子の材料としていいものが豊富にあるので、将来は輸入も考えられる、というのが私の感想である。

ところでこの市内見学の途中、私は初体験の事件（？）にぶつかった。ある商店を訪れた私たちに、店主が防犯通報装置を実際に作動して見せてくれたのはいいが、当然のことながらパトカーが到着、拳銃を構えた警官が入ってきたのである。本物である!! 店主が事情を話したがなかなか許してくれず、ようやくのことでお引き取りいただいた。

観光の町としてのペンティクトンにはファミリードライバーたちの宿泊施設がいたるところに見受けられ、観光客が多数訪れていた。緑あふれる季節にはさらに賑わいをみせるであろう。

二日間の短い滞在ではあったが、池田を訪れたことのある顔なじみの市民に再会したり、新しい友人も得た。多くの人々の暖かい心に触れ、人間同士に国境は無いとの実感が今も心の中に残る姉妹都市への訪問であった。この十月にはペンティクトンよりまた、四十人の親善団が池田にやって来る。ますます大きくなる交流の輪、今から楽しみにしている。

（池田町商工会青年部部長）

ペンティクトンの市庁を訪れた池田町商工会青年部の一行

――・――・――・――・――

ペンティクトン市は、バンクーバーの東方四百キロにあり、この六月、市制七十五周年を迎えた。人口二万一千人。面積は三千五百七十ヘクタール。

気温は最低でマイナス二十五度、最高では四十度を記録したこともあるが、雨量が少なく過ごしやすい。農業（果樹）、林業が盛んで、ワイン工場のほか木材の二次加工業が多い。オカナガン湖を代表とする自然の景観やゲームファーム（自然動物園）にさそわれて訪れる観光客も多く、日本人の姿も最近とみに増えている。

池田町が一九七七年に姉妹提携をしたのは、農・林業の産業構造が似ているというのが大きな理由であった。提携以来、親善団や高校生を派遣交流し、また池田町では、バグパイプやカーリング等の受け入れも行なっている。

●池田町

カナダ人物記⑪

太平洋財団設立の立役者
ジョン・ブルック

日本をはじめ、韓国、シンガポール、香港、台湾などは、一九六〇年代から七〇年にかけて経済的な大躍進をとげ、アジア・太平洋時代の到来が云々されるようになった。この現象は、カナダに貿易増大の大きな可能性をもたらすと同時に、経済摩擦の危険性も生むことになった。

ますます重要性を増す環太平洋地域に、カナダはどう対応していくべきか――。その答えのひとつが、今年三月に設立委員会が設置されたカナダ・アジア太平洋財団。ジョン・ブルック氏はその委員長である。

「報告書作成の仕事を引き受けたのは、この構想が時期的に熟したと確信したからです」と言うブルック氏は、一九六〇年代に日加間の合弁事業の交渉に弁護士として参加して以来、二十年近くカナダとアジアの経済関係にかかわってきたアジア通である。一九七〇年代に亜鉛と鉛精鉱の対日供給元としては世界第一位となったサイプラス・アンビル・マイニング社の社長もつとめた。

「太平洋を何度も往復している間に、経済発展に対する日本人の姿勢に心打たれました。日本人には、長期的展望を立てる智恵と自信、そしてそれを達成する能力と規律があったんですね。その上、文化、習慣、言葉、技術など西欧についての知識を吸収しようというエネルギーと決意に強い印象を受けました。」

東アジアを中心とする環太平洋地域における経済発展は、カナダにも大きな影響を及ぼすだろうと考えたブルック氏は、カナダがアジア・太平洋地域の文化や社会をもっと理解する必要性を痛感する。「アジア・太平洋時代の到来」に備えるためである。

そこで一九八〇年にバンクーバーで開かれた「環太平洋の可能性を探る会議」でアジア太平洋財団の設立が提唱されると、ブルック氏は早速その設立準備にかかわることになる。そして外務大臣から同財団の実現可能性について諮問を受けたブルック氏は、連邦政府、州政府、全国各地の財界、学会、マスコミ、労働組合、芸術界、博物館など関係者の意見を打診したところ、大幅な支持を得た。その結論は、「ブルック報告」としてまとめられ、昨年九月、外務大臣に提出された。

ジョン・ブルック氏

トルドー首相はこの報告に基いて今年三月、カナダ・アジア太平洋財団設立委員会を設置、ブルック氏を委員長に任命した。

構想によると、財団は日本の国際交流基金、オーストラリアの豪日交流基金、米国のアジア協会などに相当するもので、政府その他から全く独立した機関として活動する。財団の意思決定をする理事会は、連邦政府が任命する九人、州、準州から十八人、その他五人で構成する。ブルック氏は、理事にはカナダのあらゆる地域、あらゆる分野、そしていろいろな年齢層から選ばれるよう、勧告している。

財団は、まず連邦政府の出資金一千万ドルで発足し、将来は連邦政府、州・準州政府、民間で基金を三等分する考え。

主な活動としては、①経済界、政府、大学などの対アジア・太平洋調査研究の調整②カナダの対アジア・太平洋関係に関する最新情報の収集・維持③研究活動への助成④アジア・太平洋講座（授業）の奨励⑤太平洋地域からの学生に対する奨学金授与⑥学術・文化その他の交流促進⑦太平洋地域における合同シンポジウムなどへの参画奨励⑧ジャーナリストの交流促進――などが想定されている。財団は来夏までに発足する予定である。

「カナダはヨーロッパ中心主義をやめて、もっとアジア・太平洋に目を向けなければ」と力説するブルック氏は、一九三〇年にユーゴスラビアで生まれ、五一年にカナダに移住。その後の人生をすべてバンクーバーで送っている。

編集後記

●先年亡くなった、「メディアはメッセージ」で有名なトロント大学のマクルーハン教授を、日本の一部の新聞・雑誌は「米国のマクルーハン教授」といって怪しみません。多くの在日カナダ人も、おそらく米国人と間違われた経験をもっているだろうと思います。

●本号は創刊五十号を記念して、いろいろな方々に十人の在日カナダ人を紹介していただきました。何も「この人たちは米国人ではなくカナダ人ですよ」と強調したかったからではありません。日本の社会に融け込み、日本の文化を知ろうと一生懸命勉強し、あるいは日本にいながら国際的な仕事をしているカナダ人がいることを、お知らせしたかっただけです。国民同士の理解の接点は、こういうところから生まれるのではないでしょうか。

●そういうカナダ人は、ほかにも沢山おられるだろうと思います。今後も機会あるごとにご紹介したいと考えておりますので、心当りの方が周辺にいましたらぜひ当広報部までご一報下さい。（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。
〒107 東京都港区赤坂七丁目三―三八
カナダ大使館広報部